

27年度版教科書つれづれ 22

「手で食べる、はしで食べる」(学校図書・小学4年) 学習の手引きの巻

加藤 郁夫 (読み研事務局長)

前回、「手で食べる、はしで食べる」(森枝卓士)の23年度版(以下旧版)と27年度版(以下新版)を比較し、変更されたことで、良くなったと評価をした。その最後に、

ただし、一つ気になることがある。

と述べた。それは「学習の手引き」である。

旧版では、「文章のまとめりごとの要点を書きましょう」とか「はしの使い方や形のちがいを表にまとめましょう」といった課題が指示されている。

新版では「段落のまとめりを考えながら読みましょう」とあり、「はじめ」「中」「終わり」の三つの部分に分けましょうという課題が示されている。

課題だけを見れば、「はじめ」「中」「終わり」の構成を意識させるもので、よい手引きのように見える。しかし、この構成の問い方には問題がある。

私はこの文章の構成を次のように読み取っている。

1～7段落	中1
8～13段落	中2
14段落	終わり

この文章には「はじめ」がない。ところが、手引きでは「はじめ」「中」「終わり」の三つの部分に分けましょうといっているのだから、手引きに従う限り、「はじめ」はないという答えはありえないことになる。手引きではおそらく次のような答えを想定している。

はじめ	1段落
中	2～13段落
中1	2～6段落
中2	7～13段落
終わり	14段落

「はじめ」があるという前提で読む以上、1段落を「はじめ」にするしかない。しかし、1段落は「はじめ」になり得るのだろうか、検討してみよう。

新版と旧版では1段落に変更があったことを前回述べた。ここでは新版の手引きを検討するのだから、新版の1段落を示す。

おすしやおにぎりではないのに、ご飯を手で食べているインドや東南アジアの人たちを見て、初めはおどろきました。手がよごれることが、気にならないのだろうか。どうして、はしやスプーンを使わないのだろう。

「はじめ」の役割は、問題提示もしくは話題提示である。ここでは、当然「どうして、はしやスプーンを使わないのだろう。」が問題提示になる。前回述べたように、ご飯を食べる時に「はしやスプーンを使わない」ことが、「手で食べる」ことである。つまり、この問題提示はなぜ手で食べるのだろうと読みかえることもできる。

この問題提示が、この文章全体に関わるものであれば、1段落が「はじめ」であって何の問題もない。しかし、ご飯を食べる時に「はしやスプーンを使わない」＝「手で食べる」ことに関わって述べているのは、6段落までである。6段落で次のようにまとめている。

このように、米の形とせいしつがちがいで、また、食に対する考え方のちがいが、手で食べるか、はしのように道具を使うかに分かれた理由だと考えられます。

7段落以降では

それでは、道具を使って食べるという習慣は、どこで生まれたのでしょうか。そしてはしは、どのように使われるようになったのでしょうか。

とあるように、はしに関わって述べられている。

つまり、1段落の問題提示は6段落までしか関わっていないのである。したがって、1段落は、「中1」の問題提示であり、文章全体に関わる問題提示ではない。したがって、ここを「はじめ」と読ませることは、結果的に「中1」が何について述べているのかを考えさせなくさせる。

「はじめ」「中」「終わり」という構成を読む意味はどこにあるのか。それは単に、文章を三つに分けることに意味があるのではない。

一番大きな意味は、文章全体に関わる問題提示をとらえることにある。その文章が、何についてどのようなことを述べようとしているかという大きな方向性をつかむのである。もちろん、文章によっては、文章全体に関わる問題提示が示されていないものもある。その場合でも、説明的文章では何が述べられるかわからない、どう展開していくか先が読めないというような書かれ方はされない。説明的文章は、もともと伝達を意図したものである。筆者が伝えたいこと、わかってほしいことがあるから、文章が書かれるのである。その意味では、如何にわかりやすく伝えるかが重要になる。同じ文章を読んだとして、読み手によって理解が異なるのでは、正確な伝達とはならない。誰が読んでも、同じように伝わってこそ、意味がある。そのためには、文章のはじめにおいて、何を述べようとするかを読み手に示すことが有効である。それが「はじめ」に述べられる問題提示なのである。

問題提示をきちんとつかめれば、次にはその問題提示に対する答えを読み取っていけばよい。なにを読み取ればよいのかが、人によって異なることがなくなるのである。

したがって、文章全体に関わる問題提示が明示されなくても、題名や話題提示という形で文章の方向性が示されるのである。

また、文章全体に関わる問題提示が文章内にないと読みとることに意味がある。最初に示された問題提示が文章の一部にしか関わっていないことが分かることは、文章全体の構成を掴んでいく上で、大事な問題といえる。

「はじめ」「中」「終わり」という構成を読むことは、文章における問題提示を明らかにして、その問題提示に対して、どのように筆者が述べているかを、大きくつかむことにある。俯瞰的なよみなのである。そこでは、当然のことながら、「はじめ」がないという読みとりも場合によってはすることになる。「はじめ」がないと読むことは、問題提示がわからないと理解することではない。「はじめ」がないことを読みとることで、この文章が何について述べようとしているかを理解するのである。

手引きは、「はじめ」があるものという前提でスタートしている。したがって、手引きの指示に素直に従う子どもたちは、1段落に問いの文があることから、1段落を「はじめ」と決めてしまう。

その結果、1段落の問いが、文章のどこまでに関係したものかという検討をさせないことになる。そうすると、この文章で何を述べていたかという理解は、人によって異なることになる。1段落が「はじめ」なのだから、なぜご飯をはしを使わないで、手で食べるのだろうということを中心に述べた文章だという読みとりになる。しかし、すでに見てきたように、その読みとりは間違っている。

「はじめ」「中」「終わり」という説明的文章の構成を意識することは、大事である。しかし、それはすべての文章をその枠に当てはめて読むことではない。

上手く当てはまるのか、それともうまく当てはまらないのか、当てはまらないとしたらそれはどうしてか……そのように考えることができる力を子どもたちに付けていくことが、「はじめ」「中」「終わり」という構成を教えていくねらいである。機械的な当てはめは、「はじめ」「中」「終わり」というものさしが大して役に立たないことを教えることにしかならない。